29 肥膚は争ひて刻鏤す
30 精魄は幾ど磨研す
31 信宿は常に羈泊
32 低迷は即ち倒懸

口語訳

25 （車から降り立って）小閣（くぐり戸）を開いてみると
26 好奇心に満ちた人々が南北の道にあふれて見つめているのがはっきりみえた。
27 気分が悪くなり、吐いてしまったが、それでも胸はまだむかつきがおさまらなかった。
28 体は疲労のため衰弱してしまった上に、脚までもがかがまってしまう始末。
29 （かって丸々と）肥っていた肌には苦労によるしわが、我先きを競うかのように深く刻み込まれ、
30 精神と気魄も、ともに（墨を磨るように）ほとんど擦り減ってしまった。
31 とりあえず仮の宿舎に二泊したが、所詮は旅先の気分で落ち着くことができない。
32 気分が勝れずぼうぜんとした今の心境は、まさに逆さ吊りされたような非常な苦しみである。

語釈

25○宛然…さながら、ちょうど、明瞭なさま。『詩経』「秦風、蒹葭」に「宛在水中央。［集傳］宛然、坐見貌」。の例がある。蘭尹子、『五鑑』に「譬猶昔游再到、記憶宛然。此不可忘。」の例も見える。